

# 幼児におけるオノマトペと動作イメージの結びつきの発達 Children develop association between mimetics and iconic gestures.

大竹裕香<sup>†</sup>  
Yuka Ohtake

<sup>†</sup> 東京大学大学院教育学研究科  
Graduate school of education, Tokyo Univ.  
mikakimori1129@yahoo.co.jp

## Abstract

When Japanese adults produce mimetics for expressing action or motion, they usually produce it with spontaneous iconic gestures. This study examined whether young children also do so, or gradually get to do so. Like adults, most of 6-year-old children produced mimetics with spontaneous iconic gestures, but only half of 5-year-old children did so. The results suggest that children develop the high association between mimetics and iconic gestures during this period.

**Keywords** — mimetics, iconic gestures

## 1. 問題と目的

日本人成人にとって、ブランコを揺らす様子は「ぶらぶら」、すべりだいをすべる様子は「しゅー」であり、これらのニュアンスは「前後にゆらす」「勢よくすべる」などのことばには代えられない。喜多(2002)[1]においては、1分間のアニメーションを、それを見ていない他者に説明する際、成人参加者が産出したオノマトペの94%に映像的身振り(表現対象の形態や動作を視覚的に表す身振り)が共起した一方、一般動詞には40%しか共起しなかったことを報告している。では、子どもも初めから、このようにオノマトペに映像的身振りを共起させるのだろうか。それとも、だんだん伴わせるようになるのだろうか。

オノマトペは、普遍的な音象徴を基盤としてもつため、子どもにとってもわかりやすく、一般動詞に比べて動作と結びつきやすいことばであることが示されている[2]。一方、オノマトペを対応する意味と正確に結びつけるには言語経験が必要であることや、子どものオノマトペ理解が幼児期を通して発達し続けるものであることが、これまで

指摘されている[3][4]。このことに鑑みると、幼児期を通して、動作を表すオノマトペと対応する動作イメージの結びつきが強まっていき、オノマトペと映像的身振りがだんだん共起するようになっていくと考えられる。

以上より本研究では、幼児におけるオノマトペと映像的身振りの共起について、年中児と年長児を比較した。その際、同じく動作を表すことばである一般動詞と比較し、映像的身振りの共起の発達が、動作を表すことば一般ではなく、オノマトペに特有なものかどうかについて検討した。

## 2. 方法

**対象データ**: 片山・針生(2007)[5]におけるぶらんこ・すべりだい説明課題の映像データ。

**対象**: 年中児15名(男7・女8, 平均5歳1カ月, レンジ4;7-5;6), 年長児22名(男12・女10, 平均6歳0カ月, レンジ5;7-6;6)。

**手続き**: 対象児一人ずつに対し、面接が行われた。対象児に対して、一体の人形に対し、「ぶらんこ」がどのようなものかわかりやすく説明するよう、教示した。幼児がぶらんこの説明を終えたあと、すべりだいについても同様に教示された。幼児の発話の様子は、デジタルビデオカメラで記録された。

**データの分析**: ターゲットとなる動作は、ブランコ課題では「ブランコを揺らす動作」、すべりだい課題では「すべりだいをすべる動作」とした。幼児の発話における、ターゲット動作を表すオノマトペ、一般動詞、映像的身振りを特定し、それらの共起について検討した。

### 3. 結果

説明の際にオノマトペを産出した子どもの数(年中児 12 名, 年長児 16 名), ターゲット動作を表す映像的身振りを産出した子どもの数(年中児 10 名, 年長児 14 名)には, 年齢差はなかった。

オノマトペ産出が見られた子どもを対象に, 産出されたオノマトペに, 身振りが共起したどうかについて, 年齢ごとに子どもを 2 群に分け (オノマトペに身振りの共起あり/共起なし), それぞれの群の人数を比較したところ, 有意な差が見られた (Table1, Fisher の直接確率法,  $p=.029$ )。ここから, 年中児より年長児の方が, オノマトペに映像的身振りを共起させており, 成人と同じように, オノマトペを発話する際はほとんど映像的身振りを共起させていることが示唆される。

また, ターゲット動作への言及の際に用いられた一般動詞について, 身振りの共起が見られるかどうか分析を行った(年中児 14 名, 年長児 20 名)。その結果, 映像的身振りの共起はほとんど見られず, また年齢間で差は見られなかった(年中児:共起ありは 3 名, 年長児:共起ありは 2 名)。

Table1. オノマトペに身振りが共起した人数

	共起あり	共起なし	計
年中児	6 [50%]	6 [50%]	12
年長児	14 [87.5%]	2 [12.5%]	16
計	20	8	28

### 4. 考察

上記の結果からは, 年中児から年長児にかけて, オノマトペには徐々に映像的身振りが共起するようになっていくということが示された。また, 一般動詞については, 同様の増加はみられなかったため, このことはオノマトペ特有の現象であるということが示唆される。

子どもにとって, ある動作をそれに合致するオノマトペと対応づける感覚は, 3 歳ごろすでに持っているものである [2]。そのような感覚を基盤としながらも, 保育者がオノマトペを動作とともに使用するのを観察し, また自分でオノマトペを

身振りとともに使用するといった経験の中で, 特定の動作に特定のオノマトペを結びつけることを繰り返すことを通して, その結びつきを強めていくと考えられる。

発話にともなう身振りは, 幼児期から, 児童期にかけて一度減少し, 大学生ではふたたび増加することが報告されている。このことは, 発話に伴う身振りが, 幼児期からおとなにかけて, 発話の補完的役割を担うものから, 発話と呼応する冗長な表現手段として自立していく, 発達的变化を示すものであるという [6]。この中で, 本研究で見られた, オノマトペに共起する同じ動作を表す映像的身振りが, 幼児期において大人と同じように共起するようになっていくことは, その発達的变化の先駆けであると言える。オノマトペと動作イメージの結びつきの発達は, 発話に伴う身振りが構造化されていくことを足場がける機能も有しているのかもしれない。

### 5. 引用文献

- [1]喜多壮太郎(2002) ジェスチャー 考えるからだ 金子書房
- [2] Imai, M., Kita, S., Nagumo, M., & Okada, H. (2008). Sound symbolism facilitates early verb learning. *Cognition*, 109(1), 54-65.
- [3]針生悦子・趙麗華(2007) 有声音と無声音を大小に対応づける感覚の起源: 擬音語理解の日中比較. *心理学研究*, 78, 424-432.
- [4]針生悦子(2010) 幼児における擬音語の理解—濁音文字知識の影響に注目して— *教育心理学研究*, 58, 275-284
- [5]片山顕裕・針生悦子(2007) 幼児におけるジェスチャーの視点—認知的役割取得との関連— *教育心理学研究*, 55, 266-275
- [6]藤井美保子(1999) コミュニケーションにおける身振りの役割—発話と身振りの発達の検討— *教育心理学研究*, 47, 87-96.